俳句 大津俳句会

句の縁絶やすことなく涼新　岩崎由美子

流灯はみるみる燃へて流れをり　井上　昭子

秋めくや音たて流る川下り　大塚喜久子

あやまちの涙の枯れぬ原爆忌　岡崎　浩子

マラソンの選手の勇姿夏五輪　佐賀　久子

忘れじと軒を旋回秋つばめ　佐澤　俊子

俳句 つのはな句会

くっきりと飛ぶ夏燕思いのまま　梅木トキエ

蝉時雨親鸞の書を読む父の顔　塚本　洋子

二丁目で秋の産声聞く日暮れ　榮田しのぶ

緑陰に黙して風の吹くままに　村田　健二

マイマイの流行を追わぬ歩みかな　志賀　孝子

焼き茄子に亡き父がくる母が来る　田上　公代

敗戦の記憶脳裏に草を刈る　木庭　杏子

ほうほうたる母の指輪を捜している　上杉　波

生家解く紫陽花の青滲み出す　矢嶋　道子

短歌 大津短歌会・野づかさ

五島灘飛ぶがごとくに船はしる船側に飛沫ふきあげながら　鞍　岳志

ほととぎす今朝は鳴きつつ家籠る老いの吾にも夏を告げくる　山本　泰子

老楽の夫婦の契りもあと少しほけたる君の寝顔がすずし　吉田　良子

短冊に願いしたため結べども書けぬ望みの一つはありて　荒木　麗子

あし細くこころもとなくカーテンのゆらぎにすがり蚊トンボとまる　田中　玲子

木に宿る風蘭白き花咲きて良き香を放つ梅雨の晴れ間に　豊岡ミツル

ひまわりは頭を垂れて咲きにけり厳しき熱気沸き立つなかに　小平　善行

母の声聞きたるごとし裏木戸に夕べの風の吹き抜けていく　吉永　恵子

母猫とその娘猫なに故に良く似る爪たて噛みつくところ　坂本　杲子